

長岡京に納められた米

写真で紹介しているのは、「木簡」という木の札に文字が書かれたものです。木簡とは、まだ紙が希少であった奈良時代頃に、行政文書や諸記録、荷札などとして木の札に墨で文字を書いていたものです。写真の木簡は、上部がくびれているため、この部分にひもを付けて結び、地方から都へ納める品などの荷札として用いられたものです。

この木簡には

（右側）「美作国吉田郡能鷄」

（左側）「美作国吉田郡香美郷白米」



長岡京出土木簡（複製）
鏡野郷土博物館展示



現在の長岡京太政官厨家跡
（京都府向日市）

と書かれています。「香美」「能鷄」というのは、鏡野町域の古代の地名です。「香美」は、現在は「香々美」と書きますが、古代の地名は漢字二文字とすることが定められていたもので、このような表記となっています。「能鷄」は、あまりなじみはありませんが、後の時代には「野介」という表記で古文書などにも出てくる地名であるといえ、おわかりになる方もいるでしょう。これが見つかったのは、現在の京都市向日市にかつて存在した都、長岡京の跡になります。

ります。

長岡京とは、延暦三年（七八四）に、桓武天皇の勅命によりそれまでの都であった平城京から北へ約四十kmの長岡の地に造営され、延暦十二年（七九四）に平安京に遷都されるまでの十年間にわたって機能した都です。

この木簡は、長岡京の左京三条二坊という所の発掘調査によって溝の跡から出土したもので、ここからは、当時の都の役人たちが使用していたと考えられる食器や祭祀具、文具、工具、建築資材等が大量に出土しました。中でも木簡の出土は多数に及び、この木簡によりこの地域は太政官厨家であったことがわかりました。

「太政官」とは現在の内閣府にあたり、太政官厨家は太政官管轄の役所で、地子物（土地に課された税を米などで納入したもの）の管理や、太政官の役人の食事を作る厨房、食器などの器物の保管を行っていた所です。

太政官厨家跡から見つかった木簡の荷札には、「白米」「米」「地子米」と書かれていたものがほとんどで、国名・地名は越前（福井県）・美作・長門（山口県）・讃岐（香川県）・伊予（愛媛県）と限定され

ています。また、これらの木簡は溝に一括で廃棄されており、その後移動した形跡はないことから、太政官厨家にはこれらの国から税として納められた米を収蔵されていたことがうかがわれます。

これらのうち、美作国の地名が書かれた木簡は十九点、このうち吉田郡内の地名が書かれているものは八点、この中で鏡野町域の地名が書かれているものは写真の二点のほか、もう一点、「香美」と書かれたものが出土していますので、計三点存在しており、少なくともある一定の間は鏡野町域で獲れた米が長岡京の太政官の貴族や役人達の食卓に並んでいたことが想像できます。

当時の政府の最高機関である太政官の厨房に、なぜ美作国を含む上記五ヶ国の米のみが納入されていたのかは、記録がないため定かではありませんが、美作国に住む私達にとっては、奈良時代からこれらの国の米が質が良いという高い評価をうけていたのだと願いたいものです。

参考資料：『鏡野町史』史料編、「長岡京木簡 二」

『鏡野郷土博物館講演録』

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733